

12月4日 水曜3限基礎講読

Language Change: Progress or Decay (Chapter9,10)

担当者：後藤茉衣・鈴木陽斗・宮森創介

### ①Summary

#### Chapter9: 跡をかえす（言語の意味変化について）

##### ・イントロダクション

19世紀、言葉の意味が変化してしまうことは恐れられていた。また20世紀には、1つ1つの言葉はパッチワークのキルトのようにあるべき場所があるとされていた。しかし1970年代にプロトタイプ理論が提唱され、人間があるカテゴリーの中の事物を平等に考えていないということが言わされた。言語においても単語は決まりきった意味を持つのではなく、ほとんどの語に複数の意味が共存している。この章では単語の意味変化がどのように起こるのかというトピックへの伝統的なアプローチに触れ、近年の研究が、関連する過程をどのように明らかにしてきたかについて述べる。

##### ・取り残された意味変化研究

意味変化についての研究は1820年代から続けられてきたが、主流の学者からは無視される傾向にあった。Brealは意味変化的法則や新しい表現、イディオムの盛衰はまだ見つかっていないだけだと主張したが、普遍的な法則を見つけるには至らなかった。他の学者たちもまた成功しなかった。

##### ・意味変化の要因

意味変化は数え切れないほどの原因によるもので、扱うのは不可能だとする学者もいた。言語学的、歴史的、社会的要因が一般的にあげられたが、他にも心理学的要因や宗教的理由が考えられる。

##### ・本当にパッチワークなのか

20世紀、言語学の主要な考え方であった構造主義言語学により、言語は独立したかけではなく、囲われた言葉の網の中にあるとされていた。ひとつの言葉の意味が変わると、連鎖的に近くにある言葉の意味も変わるとされた。しかし、実際はパッチワークのように整然とされているわけではなく、スconeの上のジャムとクリームのように、一部が重なったり、隙間が存在したりする。

##### ・カッコウモデルと多様な意味

言葉の意味は突然互いに押し合うことはせず、新しい意味が古い意味に加わり、ある程度の間共存する。そして、若いカッコウが巣から元の住人を追い出すように、だんだん新しい意味が古い意味に取って代わる。こうしたモデルは19世紀の終わりにHermann Paulによって発見されており、語には標準的意味と副次的意味があり、副次的意味が一般化していく可能性があるとした。しかし、実際は、新しい意味が起こると、半永久的に共存し、しばしば元の古い意味を失うことなく存在する。

### ・言葉のあいまいさ

言葉とはそもそもあいまいなものである。言葉は核となる意味を持ち、それが周辺部へと広がっている。長い目で見れば、多様な重複した感覚や同音異義語も引き起こしうる。このあいまいさを制御する方法は、1970年代半ばに Eleanor Rosch によって提唱された。人間は全てのカテゴリーの構成要素を同等に位置づけないと示され、典型的なものを良しとし、典型的でないものまでもカテゴリーに含むことができる。そして、極端に典型的でない使い方は、隠喩とされて認知されることが多い。しかしそれに慣用的になると元の使い方と隠喩的な使い方の間に明確な境界線はなくなり、一時的な隠喩なのか、慣用的な隠喩なのか、永久的な意味変化なのかをはっきりさせることは難しくなる。

### ・層の形成と多義性

新たな意味は、それまでにあった意味と共に意味の層を作る。ある言葉の類型、例えば壊滅的な出来事を表す言葉などは特にそれが多重になる。新たなトピックの領域で使われることで、その言葉に新たな感覚のアイデンティティが部分的に発生する。その言葉は強意語などの周りの言葉によってどのような意味かが理解され、誤解を少なくする。

### ・普遍的な法則

言語変化の普遍的な法則は未だに発見できていないが、変化の仕組みは理解されつつある。言葉の変化を列挙することは、あまりよくないこととされてきたが、最近はそれによって言語がどのように機能しているかだけでなく、どのように始まったかということへの理解が深まるとして、再評価されている。

## Chapter10: なぜ?—変化の社会言語学的な要因

### ・イントロダクション

言語変化の原因は主に2つに分類でき、1つ目は外的な社会言語学的な要因で、2つ目は内的な心理言語学的な要因、つまり言語構造やその言語の話者の精神によるものである。この章では流行、諸外国の影響、社会的必要性という、三つの社会言語学的要因について言及する。

### ・流行と偶然の変化

話者が「偶然」発音における強勢の位置を見失う現象が1950年代に流行した。これに対して Charles Hockett は次第に強勢の位置がずれて変化が起こるだろう、と主張した。しかし筆者は変化に流行という社会的要因が影響することは否めないが、それが主な原因ではないとしている。多くの言語学者は流行の変化を単に言語変化のきっかけとなる一要素であると捉えていて、本当の原因は表面化に隠れていると考えている。

### ・外的要因

言語変化の大部分は外来の要素の侵入によって引き起こされたと主張する言語学者がいる。例えば移民が新しい土地でその地域の言語を学ぶ時、あるいは土着の人々が新たな支配者の言葉を学ぶとき、完璧に身に着けられなかつたりしたことが挙げられる。彼らはその言語

を不完全なまま子孫に伝えていくため、その過程で徐々に言語が変容する。移民は、誤った発音を過剰に修正してしまう傾向がある。また外来の要素が侵入するもう1つの状況は、国境付近での言語同士の接触である。そのような地域に住む人々は、生活のため互いの言語を理解し、多くの場合多言語話者であった。このような状況では、言語は互いに影響し合い、その影響は接触の期間が長いほど強くなる。

#### ・基層 vs. 借用

外国語から新たな要素を取り込む時、受け入れる側の言語の根底にまで影響をあたえるものと、単なる借用と、2つの異なるタイプが存在する。人々はそれまで知っていた言語の音やパターンや語順を、新しい言語を使うときに無意識的に用いてしまうことがあるが、単語をそのまま使おうとすることは少ない。しかし、新しい言語の中の使いやすそうな要素を拾い、既に知っている言語内で用いるとすれば、それはほとんどの場合単語である。これら2つのタイプを厳密に分けることは常に可能であるとは限らず、同じコインの表裏のようであるともいえる。

#### ・長期貸出の借用

借用には主に4つの傾向がある。一つ目は元の言語から取り外しやすく、借用する言語の構造にあまり影響を与えない要素が取り込まれやすいということ。二つ目は借用された要素は受け手側の言語構造に合わせて変形されるということ。三つめは借用する側の言語にすでにある要素の表面的に似ている要素が選ばれるということ。四つ目に変化は少しづつ起こること。つまり、借用は受け手側の言語の基礎を突然搖るがるものではなく、既に存在する要素に従って借用は起こる。

#### ・必要性と機能性

言語変化が起こる社会言語学的な要因の3つ目は必要性である。言語は、使用者のニーズに合わせて変化するという考え方である。必要でない単語は使われなくなっていく一方、必要となった単語は新しく増えていく。また、より適切な単語への差し替えや、より良い印象を与えるための言い換えが行われたり、使い古された語の代わりが現れることもある。社会的なニーズに対応した変化は、単語に追加だけでなく、品詞転換によって新しく表現が生まれることもある。

#### ・礼儀正しくて損はない

世界中の人々が似たような形で、礼儀正しく振舞おうとする。礼儀正しさは言語構造に影響を与える。それゆえ世界の異なる地域において丁寧さによってもたらされた、似たような変化が起こっている。とりわけ、代名詞における変化はあらゆる言語に見られる。

#### ・情報の中に紛れ込んでいるもの

日常会話において情報がコンパクトすぎると聞き手がうまく受け取ることができないことがあるため、表現を膨らませて話す傾向がある。そしてこの膨らませ方が言語の構造に影響を与えていているといわれている。これも社会的なニーズによる言語変化の一例である。

#### ・弱さを利用する

このように言語変化は、表面的には社会言語学的要因によって起こったといえる。しかしこれらの多くが本当の要因ではなく、既に言語内で起こっている変化を加速させる酵素のような働きをしている。社会言語学的要因は、言語の中に既に存在する弱点につけこみ、それによって変化を促すのだ。

## ②Research (発表者が要約したもの)

〈言語のあいまいさについて。比喩表現との関連で慣用句を考察する〉

慣用句と呼ばれるものの多くは、本来比喩であったものが、多数の人に長い間使われることによって、死んだ比喩、色あせた比喩となったものであることはしばしば指摘されている。完全な適格文が慣用句となっていて、字義的な読みと慣用句的な読みの双方を持つような場合はどのように考えればいいのだろうか。次の三種類の表現を区別して考察してみる。

- (i) 慣用句的読みと字義的読みの双方を持つ表現：骨を折る、手が出る、花を持たせる
- (ii) 慣用句的読みだけを持つ表現：たかをくくる、腹が立つ、やまを張る
- (iii) 字義的読みだけを持つ表現：服を着る、川が流れる、山に登る

ここで慣用句的読みだけを持つ(ii)の型の表現は、本来、比喩的表現であったと考えられる。これらの例は、字義的解釈の不可能な逸脱文であるから、比喩的解釈を受けるしかない。この表現においては、比喩と慣用句との区別は曖昧である。なぜなら、比喩が言語社会の中で固定化して慣用句となっていく過程には様々な段階があり、その過程は多様なものだからである。では(i)の型の場合はどうだろうか。(i)もやはり、この表現が比喩的解釈を受けた結果出てくるものであると考えられる。字義的解釈が不可能な場合に、すなわち、なんらかの逸脱がその表現に存在する時、その逸脱を解消する手段として比喩的解釈が行われる。(i)の例が持つ逸脱とは、文脈的逸脱と呼ぶべき性質のものである。

## ③Question

- ・現代の日本で元々の意味とは違った意味で使われている表現にはどんなものがあるか。
- ・身近にある、意味変化した言葉の例を挙げ、新旧どちらの意味も共存しているかどうか考えてみよう。例えば"微妙"という言葉は辞書にある意味と、近年において使われる場合で意味が対極的だが、これは共存といえるだろうか。
- ・「タピる」「ディスる」というような言葉がある。今後社会的ニーズに合わせて、このように動詞化すると考えられる単語にはどんなものがあるか。

## ④Reference

坂本勉 「慣用句と比喩：慣用化の度合いの観点から」 京都大学 1982